



低温研ニュース



1996年 3月 No. 1



オホーツク海の流氷

●目次

| | |
|------------------------|----------------------|
| 研究所の改組によせて | 平成7年度共同研究採択課題..... 5 |
| 所長 秋田谷英次..... 2 | 平成8年度共同研究公募要領..... 7 |
| 運営協議会、共同利用委員名..... 3 | 人事公募..... 7 |
| 改組記念講演会・式典 若土正暁..... 3 | 人事異動..... 8 |
| シンポジウム報告 福田正己..... 4 | 編集後記..... 8 |
| 本堂武夫..... 5 | |



●研究所の改組によせて

低温科学研究所長 秋田谷英次

低温科学研究所は平成7年4月に大学附置研究所としては全国で18番目の全国共同利用型の研究所に改組されました。この研究所は世界で初めて人工雪を作った理学部教授・中谷宇吉郎の業績により、54年前の昭和16年に北海道大学最初の附置研究所として設立されました。その時の設置目的は「低温における科学現象に関する学理及び応用の研究」であります。中谷が著書の中で「自然科学の任務は、自然のはかり知れない強い力を認識し、その本性を知ることによって、巧くその力を利用することにある」と述べているように、諸先輩は低温に特有な諸現象を科学的に調査解明し、その応用研究により社会の要請にこたえてまいりました。

近年、地球の温暖化をはじめ地球全体の気候変動や環境悪化が問題となり地球科学的視点での研究の必要性が叫ばれてきました。この度の改組はこの様な背景に基づき、設置目的は「寒冷圏及び低温条件下における科学現象の基礎と応用の研究」と変更されました。従来の細分化された研究の枠を広げ複合的・学際的研究を進めるため小部門を大部門とし、さらに内外の研究者と共同研究を促進するため全国共同利用型の研究所としました。すなわち、寒冷海洋圏の海水を含む自然現象を学際的・総合的に研究する「寒冷海洋圏科学」、寒冷陸域の雪氷環境を地球科学・環境科学の視点から研究をする「寒冷陸域科学」、寒冷圏の特徴的現象を物質科学および生物科学の立場から研究を行う「低温基礎科学」、寒冷海洋圏と寒冷陸域にまたがる自然現象の総合的研究を行う「寒冷圏総合科学」の4大部門とオホーツク沿岸地域の流水を含む寒冷海洋圏の自然・生物環境の共

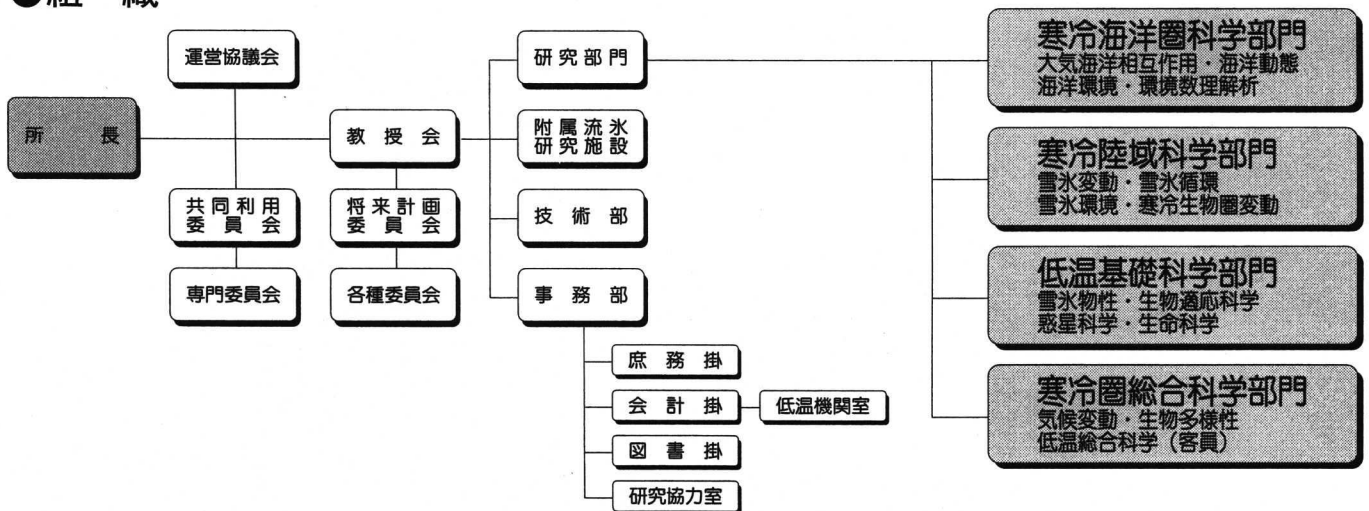
同観測、実験的研究を行う「流水研究施設」に再編成されました。改組により定員増も認められ、また、寒冷圏総合科学部門には2名の客員教授の枠も新設されました。

初年度の共同研究は平成7年10月からスタートしましたが、所外からの多くの研究者が参加され、78の研究課題、所外の研究者延べ267名に至っています。共同研究は毎年公募により継続するもので、多くの研究者に本研究所を利用していただき研究成果があげられる事を切望しています。さらに、共同利用研究所になって一番の特典はCOEによる研究(研究機関支援プログラムによる)が認められることで、現在平成8年度実施の準備を進めています。これは寒冷海洋・陸域を含む自然環境の総合的調査研究で調査地域はシベリヤ、オホーツク、カムチャツカを中心とした地域を海洋、雪氷、気候、生物の変動や相互作用を学際的に研究するものであります。「オホーツク海と周辺陸域における大気・海洋・雪氷圏相互作用」という研究課題を考えております。これらの研究を通して内外の研究者と交流を深め、研究の活性化を計るなど研究所にとって新たな発展が期待されています。そのために、特に改組後の数年間は新しい研究を軌道に乗せ、さらに共同利用研にふさわしい成果をあげなければなりません。

今後の研究成果は改組によって再出発した研究所の業績として外部からも注目され、評価されることとなります。輝かしい研究成果をあげ、新しい研究所の歴史の一頁をかざるにふさわしいものでなければなりません。そのためには所員のたゆまぬ努力は勿論、外部委員を含む運営協議会、共同利用委員会、および多くの共同研究者のご協力とご支援がなければ不可能であります。

この度の改組は諸先輩によるこれまでの輝かしい業績のもとに、文部省をはじめ学術会議、北海道大学の関係部局、事務局のご理解・支援の賜であります。これら関係各位の期待に添うよう所員一同努力する所存です。

●組織



●定員

- | | | | | | |
|------|-----|------|-----|----------------|---------|
| ●教授 | 15名 | ●事務官 | 16名 | ●客員教授(II種) | 1名 |
| ●助教授 | 15名 | ●技官 | 13名 | ●外国人客員教授(III種) | 1名 |
| ●助手 | 22名 | ●合計 | 81名 | ●大学院生 | (現員)81名 |

●運営協議会委員名

| | |
|---------------------|--------------|
| 東大海洋研究所 | 平 啓 介 教授 |
| 国立極地研究所 | 平 沢 威 男 教授 |
| 〃 北極研究センター | 渡 辺 興 亜 教授 |
| 名大大気水圏科学研究所 | 半 田 暢 彦 教授 |
| 京大生態学研究センター | 川 那 部 浩 哉 教授 |
| 国立宇宙科学研究所 | 水 谷 仁 教授 |
| 中部大学国際関係学部 | 樋 口 敬 二 教授 |
| 気象庁札幌管区気象台 | 窪 田 将 台長 |
| 海上保安庁第一管区海上 保安本部 | 堀 井 良 一 水路部長 |
| 北海道大学 | |
| 地球環境科学研究科 | 戸 倉 清 一 教授 |
| 〃 | 松 野 太 郎 教授 |
| 農学研究科 | 水 谷 純 也 教授 |
| 理学研究科 | 引 地 邦 男 教授 |
| 触媒化学研究センター | 東 市 郎 教授 |
| 工学研究科 | 前 普 爾 教授 |
| 低温科学研究所 | 秋 田 谷 英 次 教授 |
| 〃 | 竹 内 謙 介 教授 |
| 〃 | 本 堂 武 夫 教授 |
| 〃 | 吉 田 静 夫 教授 |
| 〃 | 芦 田 正 明 教授 |

●共同利用委員会委員名

| | |
|----------------|----------------|
| 国立極地研究所 | 山 内 恭 教授 |
| 北極圏環境研究センター | 中 尾 正 義 助教授 |
| 名古屋大学大気水圏科学研究所 | 小 林 俊 一 教授 |
| 新潟大学 | 鈴 木 範 男 教授 |
| 積雪地域災害研究センター | 〃 |
| 北海道大学大学院理学研究科 | 片 倉 晴 雄 助教授 |
| 〃 | 工 学 部 佐 伯 浩 教授 |
| 農学部附属演習林 | 松 田 彊 教授 |
| 大学院地球環境科学研究科 | 甲 山 隆 司 教授 |
| 〃 | 〃 |
| 〃 | 高 橋 英 紀 助教授 |
| 〃 | 田 中 教 幸 助教授 |
| 低温科学研究所 | 秋 田 谷 英 次 教授 |
| 〃 | 〃 |
| 〃 | 前 野 紀 一 教授 |
| 〃 | 〃 |
| 〃 | 福 田 正 己 教授 |
| 〃 | 〃 |
| 〃 | 戸 田 正 憲 教授 |
| 〃 | 〃 |
| 〃 | 遠 藤 辰 雄 助教授 |
| 〃 | 〃 |
| 〃 | 大 島 慶 一 郎 助教授 |
| 〃 | 〃 |
| 〃 | 石 川 信 敬 助教授 |
| 〃 | 〃 |
| 〃 | 古 川 義 純 助教授 |
| 〃 | 〃 |
| 〃 | 成 瀬 廉 二 助教授 |
| 〃 | 〃 |
| 〃 | 藤 川 清 三 助教授 |
| 〃 | 〃 |
| 〃 | 片 桐 千 仞 助手 |

●改組記念講演会・式典

若土 正暁 (寒冷海洋圏科学部門)

低温科学研究所は、平成7年4月1日より附置研究所から全国共同利用型の研究所に改組された。また、従来の小部門制を廃し、新たに大部門制を導入した。このため、今後は複合領域の開拓にも積極的に取り組みつつ、広く内外の研究者との共同研究を通してより学際的な研究を推進していく事が大きな課題となる。

当研究所では、今回の改組に多大のご尽力を頂いた学内外の関係各位のご臨席を頂き、平成8年1月30日に下記のような記念講演会、式典を挙行了した。ご講演下さった4人

の先生方からは、それぞれのご専門の立場から貴重なご提言を頂き、また、式典ではご来賓の方々から今後の低温研に対する期待を込めたご挨拶を頂いた。また、式典終了後に行われた祝賀会では、多くの低温研OBが集い、久しぶりに懐かしい話に花が咲いた。

記

1. 記念講演会

| | | |
|--------|---------------------|-------|
| 挨拶 | 低温科学研究所長 | 秋田谷英次 |
| スライド上映 | 「低温科学研究所—21世紀への展望」 | |
| 提言 | 「低温科学研究所に期待する」 | |
| | 中部大学国際関係学部教授 | 樋口敬二殿 |
| | 北海道大学大学院地球環境科学研究科教授 | 松野太郎殿 |
| | 東京工業大学理学部教授 | |
| | (低温科学研究所客員教授) | 中澤 清殿 |
| | 北海道大学農学部附属演習林 | |
| | 苫小牧地方演習林長 | 石城謙吉殿 |

2. 記念式典

| | | |
|----|--------------------|-------|
| 挨拶 | 低温科学研究所長 | 秋田谷英次 |
| 式辞 | 北海道大学総長 | 丹保憲仁殿 |
| 祝辞 | 文部省学術国際局研究機関課 | |
| | 国際プロジェクト官 | 北尾善信殿 |
| | 国立極地研究所長 | 平沢威男殿 |
| | 北海道大学大学院地球環境科学研究科長 | |
| | | 戸倉清一殿 |



●シンポジウム報告

平成7年度

北海道大学低温科学研究所シンポジウム

(第4回日本・ロシア共同シベリア永久凍土調査報告シンポジウム)

福田 正己 (寒冷圏総合科学部門)

1 はじめに

今年度のシンポジウムは、第4回日本・ロシア共同シベリア永久凍土調査報告シンポジウムとして平成8年1月22日、23日に北大100年記念会館で開催された。シンポジウムは過去4年間にわたり、日本とロシアとの共同研究によるシベリア調査の成果を、相互に交換し、また内容についての討論を行う目的で既に3回にわたり、開催されてきた。今回のシンポジウムでは30件の成果発表が行われ、また65名の参加者があった。以下にその内容等を報告する。

2 開催の経緯

平成3年度より低温研を中心として、文部省科研費補助金国際学術研究の一環でのシベリア永久凍土調査が実施されてきた。(研究代表者 福田正己)。これと併行してやはり科研費国際学術研究によるシベリア地域の気候環境調査が北大工学部(代表 太田幸雄)によって実施された。また環境庁国立環境研究所のグループは環境庁推進費によるシベリア全域の気候中温暖化ガスのモニタリング観測を実施した。またシベリアタイガ地域における炭素循環を課題とする農水省森林総合研究所のグループも現地調査を実施した。これだけの規模の共同研究が、シベリア永久凍土地域で実施されたことはかつてなかった。観測・調査の実施に際して、研究レベルでの協力に加えて、具体的な実施方法でも相互に綿密な連絡体制を確立して、野外調査の実施には困難な状況にあるシベリアでの調査の円滑化を計った。

調査終了後、相互の成果を持ち寄り、研究検討会を企画することになり、第1回のシンポジウムが平成4年1月に北大低温研で開催された。その成果は英文報告書として同年3月に出版された。以降毎年筑波環境研、森林総研と開催場所をかえてシンポジウムが開催され、いずれも英文報告書を出版してきた。既に過去4年間での共同研究では、日本側調査参加者は120名を超え、また現在の困難なロシアの科学研究体制での研究支援として評価を受けつつある。また過去の実績により、IGBP 本部から新たな Intercores Project として Northern Eurasian Study をこの研究組織を母胎として立ち上げるように要請を受けるにいたった。そうした意味で、今回開催された第4回シンポジウムは意義深く、この提案について討論するセッションを

設けた。

3 内容等について

1日半にわたるシンポジウムはテーマ毎に7セッションに分けられた。

大気化学のセッション1では5件の発表があり、シベリア全域での航空機を使用した大気温暖化ガスの濃度分布調査結果、及び西シベリア湿地域での長期変動が報告された。特にメタンガスの垂直濃度分布と地表面付近に発生する逆転層との関連から、メタンガスのフラックスを推定する新たな方法と成果が注目を集めた。セッション2では生態学的側面からの植生と動物の分布について、5件の発表がなされた。凍土班との共同研究に関連して、コリマ川流域での植生分布と特徴についての報告がなされた。またショウジョウバエの分布についての動物地理学的考察についての報告があった。セッション3では上述した IGBP-NES の準備状況について、昨年11月に筑波で開催された国際研究集会の報告と今後の方針などが討議された。

翌日はセッション4、5の永久凍土中の地下水(エドマ)の成因とその古環境復元について9件の成果発表がなされた。特にコリマ川下流での長期メタンガスフラックス観測では、発生に関わる環境要素として地下水位とその地球化学的環境に注目した観測成果が報告された。そのセッションに引き続いて、現在低温科学研究所の客員教授として滞在中の、モスクワ大学地理学部の凍土・氷河教室主任教授の V. N. Konoshchev(コニシェフ)氏がエドマの成因についての特別講演を行った。その中で、エドマの形成時期が最終氷期のなかの亜間氷期とするのがロシアの学会の主流であると述べた。セッション6では森林生態を中心とする6件の発表がなされた。タイガを構成するの光合成に関わる生理条件等が報告され、またタイガ地域の土壌中に貯留された炭素総量の見積もりが報告された。セッション7では、森林生態の他に GAME-Siberia の研究計画やシベリアの少数民族の伝承についての興味深いビデオが公開された。

4 終わりに

シンポジウムで発表された報告は、英文論文集として現在編集中である。従来のスタイルを踏襲するが、今回はコニシェフ教授の協力を得て、ロシア語の要旨も付け加える予定である。ただこうした出版物の配布の方法や、出版物の評価などを考慮すると過去の出版物を含めて一般に入手可能な論文集への再編集が望まれ、現在欧米の有力出版社と交渉中である。シンポジウムをより有意義なものとするには、開催後の成果報告を充実されることにある。すなわち、「かたち」に残る成果とする必要がある。こうした考えに従い、内容の充実した報告書を残したいと努力しつつある。最後にシンポジウム開催にあたり、研究所共同研究課題より参加者旅費と出版費の補助を受けたことを記すとともに、ここに感謝の意を表します。

「氷およびクラスレート水和物のコンピュータシミュレーション」

本堂 武夫 (寒冷陸域科学部門)

種々の物性研究において、コンピュータ・シミュレーションは、物性・構造の理論的予測や実験結果の解釈に欠かせない研究手段となりつつある。氷やその関連物質についても、長期にわたってモデルの改良が行われた結果、様々な条件下の構造や物性を議論できるレベルになってきた。これをさらに発展させて、多くの研究者が容易に使えるシミュレーション・システムをめざして、表題の研究集会を平成7年12月7日、8日の2日間、低温研で開催した。参加者は、低温研と工学部を中心に約25名であった。講演題目および講演者は以下の通りである。

Introductory Talk—氷の物理における未解決の課題—

本堂 武夫 (北大低温研)

全原子を独立に扱う、水、氷のための原子間相互作用モデルの構築

河村 雄行 (東工大)

氷 I、II の振動スペクトル

伊藤英之助 (北大工)

ice rule 束縛下での揺らぎと散漫散乱

徳永 正晴 (北大理)

アモルファス氷に関する計算機実験

小澤 哲 (茨城大工)

包接水和物の安定性とゲスト分子の運動

田中 秀樹 (京大工)

N_2 、 O_2 -hydrate におけるゲスト分子の挙動

堀川信一郎 (北大低温研)

高圧氷の構造相転移

樋渡 保秋 (金沢大理)

特別講演

J.S. Tse (NRC Canada)

●平成7年度共同研究採択課題

1. 一般共同研究

- 1 土谷富士夫 帯広畜大・教授 凍土造成による核廃棄物保存法の開発の基礎野外実験
- 2 村本健一郎 金沢大・工・助教授 海水ビデオ映像の広範囲解析データと衛星データの対比に関する研究
- 3 田中夕美子 北大・演習林・教務職員 落葉広葉樹林における蒸発量の評価
- 4 加藤 學 名古屋大・理・助教授 氷衝突実験による氷衛星形成過程の研究
- 5 矢作 裕 道教育大釧路校・教授 土や水の凍結融解現象を素材とする科学教材の構成
- 6 開発 一郎 広島大・総合科学・助教授 凍結しつつある土壌中の水分変動の観測
- 7 片桐 千仞 北大低温研・助手 脂質から見た昆虫の寒冷地適応

- 8 矢作 裕 道教育大釧路校・教授 湿原から発生するメタンガスに関わる土壌凍結過程
- 9 榎本 浩之 北見工大・助教授 衛星画像解析による北極域の環境変動の解明
- 10 小林 憲正 横浜国大・工・助教授 模擬星間塵アイスマントル中での有機物の生成
- 11 東海林明雄 道教育大釧路校・教授 湖水に含まれる気泡中のメタンガスの成因の研究
- 12 梶川 正弘 秋田大・教育・教授 極域における過冷却小雨滴の形成機構の研究
- 13 田口 善弘 東工大・理・助手 粉粒体の動力学と雪氷現象
- 14 高橋 正征 東大・教養・教授 オホーツク海における海水後退時の一次生産とその時空間変動の解析
- 15 伏見 碩二 滋賀県立大・環境・教授 温暖変態による雪結晶の構造特性の研究
- 16 平山 雄二 道教育大釧路校・講師 ウチダザリガニの脂質輸送
- 17 松本 淳 東大・理学系研究科・助教授 観測時代に記録された気象データからみた高緯度地域の気候変動についての研究
- 18 田口 哲 創価大・生物工・教授 海水消長過程におけるアイス・アルジーの鉛直輸送の実験研究
- 19 鈴木 啓助 都立大・理・助手 寒冷積雪流域における水収支と化学物質収支
- 20 大丸 裕武 森林総合研・東北・研究員 寒冷地域の植生をとりまく微環境の計測方法に関する研究
- 21 牛尾 収輝 国立極地研・助手 寒冷海域における係留観測手法の確立
- 22 飯倉 善和 岩手大・工・助教授 衛星画像解析によるシベリア永久凍土地域の環境動態解析
- 23 和泉 薫 新潟大・積雪災害研究セ・助教授 模擬雪崩実験による雪崩流動機構の解明
- 24 若土 正暁 北大低温研・教授 冬季オホーツク海の海洋観測—北太平洋中層水の起源を探る—
- 25 高橋 庸哉 道教育大・実践研究指導セ・助教授 鉛直過冷却雲風洞による降雪粒子の雲粒捕捉成長過程の研究
- 26 高橋 庸哉 道教育大・実践研究指導セ・助教授 降雪粒子の成長様式に着目した酸性化機構の解明に関する研究
- 27 藤川 清三 北大低温研・助教授 樹木の寒冷地域への適応に関する細胞学的研究
- 28 小林 大二 北大低温研・教授 流域融雪流出現象のモデル化と予測
- 29 竹内 俱佳 電通大・電気通信・教授 海水の音響式水厚計の開発
- 30 立花 義裕 東海大・文明研・講師 1989年を境にしたオホーツク海の海水量のジャンプ現象の解明
- 31 鷲谷いづみ 筑波大・生物科学系・助教授 生物間相互作用が冷温帯林の生物多様性維持に果たす役割
- 32 安仁屋政武 筑波大・地球科学系・助教授 パタゴニア氷原における水河変動の復元とモデリング

- 33 浮田 甚郎 東大・理学系研究科・助手 海水生成時における同位体分離効果に関する実験的研究
- 34 東 久美子 防災研・長岡・主任研究官 分光学的手法による雪氷コア中の不純物分析法に関する研究
- 35 小林 俊一 新潟大・積雪災害研究セ・教授 環オホーツク海地域における雪崩災害の実態とその特性に関する研究
- 36 小林 俊市 防災研・長岡・主任研究官 輸送管内の着雪防止に関する研究
- 37 竹井 巖 北陸大・薬・講師 自然積雪における初期構造の変化過程の誘電的研究
- 38 庄子 仁 北見工大・教授 氷床層位の精密測定法の開発
- 39 佐藤 和秀 長岡高専・教授 融雪水の積雪内浸透における化学組成の挙動
- 40 新田 隆三 信州大・農・教授 山岳地域における表層雪崩の発生・流動機構に関する研究
- 41 佐藤 威 防災研・主任研究官 吹雪の微細構造に関する研究
- 42 渡部 英昭 道教育大札幌校・教授 生物多様性を創出する系統進化と種分化に関する基礎的研究
- 43 早川 洋一 北大低温研・助教授 生物の多様性を促進する分子機構
- 44 曾根 敏雄 北大低温研・助手 寒冷圏における地形形成作用に関する研究
- 45 対馬 勝年 富山大・理・教授 雲中での雪結晶酸性化の機構
- 46 福地 光男 極地研・教授 中緯度季節海水生態系の構造と機能の研究
- 47 溝口 勝 三重大・生物資源・助教授 凍上現象のメカニズムに関する実験研究
- 48 高橋 修平 北見工大・教授 人工衛星データによるオホーツク海の海水変動に関する研究
- 49 西山 恒夫 北海道東海大・工・教授 オホーツク氷海地域における魚類生産過程と環境
- 50 塚本 勝男 東北大・理・助手 包接化合物の動的光散乱法による研究
- 51 佐藤 利幸 北大低温研・助手 トクサ科の北方寒冷圏における空間配置のスケーリング解析
- 52 油川 英明 道教育大岩見沢校・教授 雪及び氷の教材化に関する研究
- 53 庄子 仁 北見工大・教授 氷床コアの物理構造解析と気候変動
- 54 古川 義純 北大低温研・助教授 氷の融解前駆現象の実験的研究
- 55 権田 武彦 愛知学院大・教養・教授 SEMによる氷結晶の核形成及び成長の動的観察
- 56 横山 悦郎 山口大・工・助教授 動画像処理法を使ったレーダー観測(雨雲)データの速度場解析
- 57 金子 文俊 大阪大・理・助手 CiS-不飽和脂肪酸の結晶成長
- 58 芦田 正明 北大低温研・教授 バクテリアに対する昆虫の生体防御機構
- 59 丸山 稔 大阪市大・理・講師 多孔質ガラスおよび単純な土粒子中での氷の界面融解
- 60 原田 隆 北大・農・教授 園芸作物茎頂の耐凍性獲得機構および凍結保存性に関する研究
- 61 小島 賢治 北大・名誉教授 森林内雪面熱収支の一形態(特に樹幹の周りの融雪凹みの成因)
- 62 三上 岳彦 都立大・理・教授 北半球における小氷期(15世紀)以降の気候変動の研究
- 63 池田 元美 北大・地球環境研究科・教授 オホーツク海の海水・海洋結合モデルの開発
- 64 田中 教幸 北大・地球環境研究科・助教授 安定同位体比測定による雪雲中の雪結晶形成プロセスの研究
- 65 吉田 静夫 北大低温研・教授 植物培養細胞においてアブシジン酸(ABA)により誘導される細胞膜蛋白質(PM-19)の構造と機能に関する分子生物学的研究
- 66 馬場 信弘 大阪府大・工・助教授 重力流の内部構造と混合過程に関する基礎的研究
- 67 前 晉爾 北大・工・教授 凍土中のメタンハイドレイトの生成・解離に関する実験研究
- 68 前 晉爾 北大・工・教授 水を含む氷河用アイスレーダーの開発研究開発
- 69 前 晉爾 北大・工・教授 氷床コアの電気的性質と化学物質の分布に関する研究
- 70 太田 岳史 岩手大・農・助教授 積雪が存在する森林空間での水・熱輸送特性に関する研究
- 71 上田 博 北大・理学研究科・助教授 吹雪をもたらす雪雲の降雪特性に関する研究

2. 研究集会および研究企画

- 1 福田 正己 北大低温研・教授 1995年度シベリア永久凍土現地調査に関する研究集会
- 2 成瀬 廉二 北大低温研・助教授 カムチャッカ半島の氷河に関する研究企画
- 3 岩田 修二 都立大・理・教授 東アジアの平衡線高度復元に関する研究集会開催
- 4 若土 正暁 北大低温研・教授 オホーツク海の総合研究の計画・立案—大気・海洋・海水・生態系相互作用を中心として
- 5 石城 謙吉 北大・演習林・教授 寒冷圏森林生態系の生物多様性と機能に関する研究
- 6 本堂 武夫 北大低温研・教授 氷およびクラスレート水和物のコンピュータモデル構築に関する研究集会
- 7 古川 義純 北大低温研・助教授 非等方相境界の発展におけるパターン形成の動力学
- 8 齋藤 隆 森林総研・北海道・主任研究官 「生物多様性」の解明のための個体群生態学的アプローチの研究
- 9 本堂 武夫 北大低温研・教授 極地氷床コアの解析計画立案
- 10 兒玉 裕二 北大低温研・助手 極寒地帯での水文気象観測に関する研究

●平成8年度共同研究公募要領

1. 共同研究の内容 「寒冷圏及び低温条件のもとにおける科学的現象に関する学理及びその応用の研究」を目的として、研究所内外の研究者が協力して実施する共同研究を公募します。なお、共同研究の形態は、(1)一般共同研究と(2)研究集会および(3)研究企画よりなります。一般共同研究とは、当研究所の施設、装置、データ等を利用した共同研究のことです。(2)、(3)については、原則として旅費のみの申請とします。

申請に際して研究代表者として応募できるのは、各研究形態ごとに1人1件とする。

2. 共同研究者の資格 国・公・私立大学および国・公立研究機関の研究者又はこれに準ずる研究者で所長が適当と認めた者とする。

3. 研究組織 共同研究を行うにあたって、研究の推進及び取りまとめ等のため研究代表者を定めて下さい。研究代表者は所外の研究者でも、当研究所の教官でもさしつかえありません。研究組織の中には少なくとも1名、当研究所の教官(研究代表者、研究分担者のどちらでもよい)が加わる必要があります。

4. 申請方法 研究代表者は、研究内容、使用機器、経費内訳等について、事前に当研究所の関係教官と協議の上、所定の申請書(別紙様式1)1通を所属長等の承認を得てから提出して下さい。尚、研究代表者は、共同研究分担者の所属長等から別紙様式2により承諾を得て、併せて提出して下さい。

5. 共同研究期間 1年～3年 継続の場合、年度毎に所定の申請書(別紙様式1)で継続申請をして頂きます。

6. 共同研究に供される施設等 共同研究のために供することのできる施設、装置、およびデータ・資料については、共同研究応募資料を参照して下さい。

7. 申請書提出の締切 平成8年3月31日必着

8. 採否の決定及び予算配分 共同研究の採否及び配分額は、共同利用委員会で審査し、教授会の議を経て、研究所長が決定します。その結果は、後日研究代表者及び分担者に通知します。

9. 共同研究に関する成果報告 研究代表者は、共同研究終了年度の3月31日までに「共同研究報告書」(別紙様式3)1通を当研究所庶務掛に提出して下さい。共同研究の成果を学術論文として報告した場合は、そのコピー1部を送って下さい。なお、その際、論文中に当研究所との共同研究であることを付記して下さい。

10. 申請書の提出及び問い合わせ先

〒060 札幌市北区北19条西8丁目
北海道大学低温科学研究所庶務掛
TEL 011 (706) 5446・5445 (ダイヤルイン)
FAX 011 (706) 7142

●人事公募

本研究所では下記により教官を公募いたします。つきましては、ご多忙中のところ恐縮には存じますが、関係各方面への周知方御願ひ申し上げます。

記

1. 公募人員：寒冷海洋圏科学部門(化学)助教授1名
2. 研究内容：当研究所は、今年度、寒冷圏及び低温条件下における科学現象の基礎と応用の研究を目的とする全国共同利用の研究所として改組されました。その中で、当部門では寒冷海洋域が地球全体の気候システムにおいて果たしている役割の研究を中心課題としています。このたびの公募では、化学的手法を用いて大気や海洋、或いは両者における物質循環過程を研究する人を希望します。また、物理系研究者との交流に積極的な人を希望します。なお、大学院は北海道大学大学院地球環境科学研究科を担当して頂く予定です。
3. 着任時期：決定後なるべく早い時期
4. 提出書類：履歴書 主な研究歴 研究業績リスト 主要論文別刷5編以内(リストに○印) これまでの研究概要(2,000字程度) これからの研究展望(2,000字程度) 応募者についての意見を聞ける人2名の氏名及び連絡先
5. 公募締切：平成8年3月30日(土)必着
6. 書類提出先：〒060 札幌市北区北19条西8丁目
北海道大学低温科学研究所
所長 秋田谷英次
7. 問い合わせ先：北海道大学低温科学研究所
教授 若土 正暁
TEL：011-706-5480
FAX：011-706-7142
E-mail：TigersV10@lt.hines.hokudai.ac.jp
8. その他：封筒の表に「寒冷海洋圏科学部門助教授(化学)応募書類」と朱書きし、書留でお送りください。

1. 公募人員：寒冷海洋圏科学部門(リモートセンシング)助手1名
2. 研究内容：リモートセンシングを用いて寒冷圏の自然環境(雪氷、海洋、植生等)を研究しようとする人を希望します。

3. 着任時期：決定後なるべく早い時期
4. 提出書類：履歴書 研究業績リスト 主要論文別刷3編以内（リストに○印）これまでの研究概要（A4版1枚）これからの研究展望（A4版1枚）推薦書又は応募者についての意見を聞ける人1～2名の氏名及び連絡先
5. 公募締切：平成8年4月30日（火）必着
6. 書類提出先：〒060 札幌市北区北19条西8丁目
北海道大学低温科学研究所
所長 秋田谷英次
7. 問い合わせ先：北海道大学低温科学研究所
教授 小林 大二
TEL：011-706-6891
FAX：011-706-7142
8. その他：封筒の表に「リモセン助手応募書類」と朱書し、書留でお送りください。

●人事異動（平成7年度）

| 日付 | 内容 | 氏名 | 旧職（現職） |
|---------|----------------|------------|------------------------|
| 7.4.1 | 事務長 | 櫻井 正信 | 室蘭工大・図書館・事務長 |
| | 触媒化学センター共同利用掛長 | 浅野 志のぶ | 低温研庶務掛主任 |
| | 教育学部教務掛主任 | 佐々木 敏之 | 低温研事務官 |
| | 第一研究協力室主任 | 石窪 順子 | 事務官 |
| | 第三研究協力室主任 | 新山 尚子 | 理学部事務官 |
| | 学務部学生課学生掛長 | 本田 宏勝 | 低温研庶務掛長 |
| | 経済学部図書掛長 | 佐藤 透 | 低温研図書掛長 |
| | 庶務掛長 | 春藤 赫一 | 免疫研庶務掛長 |
| | 図書掛長 | 岡本 憲吉 | 附属図書館情報サービス課教養分館サービス掛長 |
| | 獣医学部会計掛主任 | 佐藤 健一 | 低温研会計掛主任 |
| | 会計掛主任 | 佐藤 誠 | 農学部経理掛主任 |
| | 庶務掛事務官 | 大江 幸人 | 医療技術短大事務官 |
| 7.8.1 | 助教授 | 藤川 清三 | 助手 |
| 7.10.1 | 客員教授 | 中澤 清 | （東工大・理・教授） |
| 7.11.1 | 助手 | 堀 彰 | |
| 7.12.1 | 教授 | 香内 晃 | 助手 |
| 7.12.15 | 客員教授 | コニシェフ V.N. | （モスクワ大・地理・教授） |
| 8.1.1 | 助教授 | 白澤 邦男 | 助手 |
| 8.3.1 | 教授 | 河村 公隆 | 都立大・理・助教授 |
| 8.3.1 | 助手 | 大河内 直彦 | |
| 8.3.16 | 教授 | 原 登志彦 | 東大・教養・助教授 |

●編集後記

低温研ニュース第1号をお届けします。読者の皆様が本当に必要なとしている情報をお送りできたかどうか不安です。今後は、「共同利用研としての低温研を利用する者」の視点から編集したいと思いますので、ご意見、ご要望、新規配布希望などをお寄せ下さい。



低温研ニュース第1号

（北海道大学低温科学研究所広報誌）

発行：北海道大学低温科学研究所 所長 秋田谷英次
〒060 札幌市北区北19条西8丁目

編集：低温研ニュースレター編集委員会
編集委員：◎香内 晃、竹内謙介、藤川清三、春藤赫一
（ご意見、お問い合わせ、投稿は◎印の編集委員まで）
電話（011）706-5500・FAX（011）706-7142
E-mail：kouchi@orange.lowtem.hokudai.ac.jp

1. 公募人員：低温基礎科学部門（惑星科学）助手1名
2. 研究内容：星間雲や原始太陽系星雲での物理化学過程、特に、氷及び有機物の生成と進化を研究する意欲のある人。現在惑星科学の分野に関わっていることは必ずしも必要ありません。
3. 着任時期：決定後なるべく早い時期
4. 提出書類：履歴書 研究業績リスト 主要論文別刷3編以内（リストに○印）これまでの研究概要（A4版1枚）これからの研究展望（A4版1枚）推薦書又は応募者についての意見を聞ける人1～2名の氏名及び連絡先
5. 公募締切：平成8年4月30日（火）必着
6. 書類提出先：〒060 札幌市北区北19条西8丁目
北海道大学低温科学研究所
所長 秋田谷英次
7. 問い合わせ先：北海道大学低温科学研究所
教授 香内 晃
TEL：011-706-5500
FAX：011-706-7142
E-mail：kouchi@orange.lowtem.hokudai.ac.jp
8. その他：封筒の表に「低温基礎科学部門（惑星科学）助手応募書類」と朱書し、書留でお送りください。